

彙報

第六回アルタイ学・中央アジア研究者集会

岡田英弘

一九六四年以来、毎夏七月に長野県上水内郡信濃町の野尻湖ホテルで開かれて来た、北アジア・中央アジア・西アジア研究者の集会、俗称「野尻湖タリルタイ」も、激化した大学紛争のあおりで、一九六九年は見送ろうということに一度はなつたが、結局は例年の参加者からの熱心な要望に依えて、七月十三日(日)から十六日(水)までの三泊四日の日程で行われた。これは例年より一日を短縮し、また出席者数においても、前年の五十七名に比すれば約半減の、次の三十名にとどまつた。

青木富太郎、後藤晃、萩原淳平、橋本勝、樋口隆康、細谷良夫、伊藤幸一、蒲原大作、神田信夫、加藤和秀、加藤九祚、河内良弘、桑田幸三、松村潤、森川哲雄、永田雄三、小田寿典、小谷仲男、岡田英弘、岡本敬二、岡崎精郎、佐口透、坂本勉、桜井徳太郎、島田正郎、田山茂、植村清二、山口信夫、山田瑞鳳、山本真知子。

第一日の十三日の午後は「registration」、第二日の十四日の

午前、および午後の大部分は「congressions」に当てられた。発言順に要旨を記す。松村は清初の崇徳建元について論文を発表。青木は「モンゴル・オイラット法典」編纂前後の情勢を清実録によつて明らかにした。加藤(九)は中央アジアの考古学遺跡を訪問、またソ連学界の最近の成果を紹介した。萩原はチャハルのリンダン・ハーンを研究中。佐口はドリン「モンゴル帝国史」の新訳を続行、英文のカザフ史を準備、「アルタイ学辞典」の項目選定に着手している。細谷は清初の八旗制度の変遷を旗地から俸餉への推移としてとらえた。桜井は東北日本のシャマニズムの実態調査を行う。山本はオスマン・トルコの近衛騎兵団制度を研究中。橋本は元朝秘史の言語とモゴール語を比較研究する。加藤(和)はティームール時代の意義を追究する。桑田は蒙疆自治政府時代の経験を語つた。永田はオスマン・トルコの地方行政制度を研究した。坂本はケレイト人とモンゴル言語の関係を論じた。小谷は中央アジアの仏教思想と美術形式の関係を問題とする。森川はチャハル史に関心がある。小田は安慧の「俱舎論実義疏のウイグル本を研究中。河内は金史を読む。伊藤は遊牧封建制を論じた。岡本は「通制条格」訳註を完了、「南台備要」に着手した。山口は「蘇毗の領界」に引き続き、白蘭・女国・東女国についての論文を準備中。岡崎は「タングート古代史」を近く刊行する。後藤はユネスコ東アジア文化研究セ

ンターの現況を報告した。岡田はワシントン大学で滿蒙語を講じ、今夏は台北の滿洲語文獻を調査する。山田はイスタンブールのウイグル文書二点を解説発表した。神田は「百二十老人語録」、「万曆武功録」を会説していること、および今夏「老滿文原檔」が故宮博物院から複製刊行されることを報告した。島田は「蒙古律例」の逐条研究を進めている。

続いて海外事情報告の第一部として植村のインド旅行、樋口のアフガニスタン、クンドゥズのチャカラク・テペ遺跡の発掘調査、およびユネスコ主催のドゥシャンベにおける「クシャン朝中央アジアの歴史・考古学・文化に関する国際会議」の報告があつた。

夜は植村のフィルム上映に当てられた。

第三日の十五日の午前には、海外事情報告の第二部として、永田がトルコ事情、河内がワシントン大学での経験について語つた。

続いて研究発表に移り、田山が「遊牧国家論に関する文獻」と題して、自編の文獻目録に基づいて論評を加えた。これに対して匈奴の単于が公権力でないとする根拠、遊牧封建制の定義、家畜税が地代と見なし得るか否か、遼・金・元が果して遊牧国家の系列に入るかどうかについて意見が沸騰した。

午後の研究発表では、桜井が「日本におけるシャマニズム研究の課題」を説いた。桜井は入巫・成巫過程を比較して東

北日本型と西南日本型に分けた上、シャマニズムの最も特徴的な行事として、「口寄せ」を取り上げ、これを「神口」、「生き口」、「死に口」に分け、さらに「死に口」を「古口」、「新口」に二分して、その行われる地方が異なることを指摘、恐らく新口が早く発生し、「古口」は祖靈崇拜の発生後の新しい形式であろうと推測した。

岡田の「ウケクト・ハーン伝説の由来」は、古いモンゴルの英雄叙事詩に、箱入りの小児王と男装の女丈夫のオイラット征服を語るものがあつたこと、これが元来ウリヤンハン部族の族祖伝承であつたらしいことを論じた。

夕食後、総括討論とスライド映写があり、第四日の十六日朝、正式に散会した。

会の規模が小さかつたことは、自由な意見の交換を容易にする効果があり、かえつて成功であつたと思われる。

第三回東亜アルタイ学会

岡田英弘

東亜アルタイ学会 (East Asian Altaistic Conference) というのは、一九六六年夏、京都大学内陸アジア研究施設(羽田記念館)主催で第一回が開かれて以来、日本、中華民国、大韓民国のアルタイ学専門家を集めて開かれて来た。毎回参